



¡Hola! desde Nicaragua

☆青年海外協力隊 ニカラグア通信 No46☆ 2012年12月16日 発行者 夏目佳代子

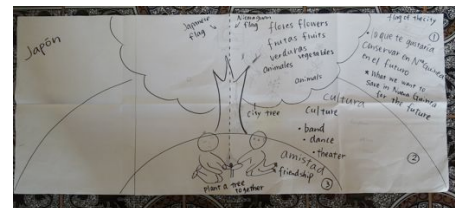
¡Hola! 今年も残すところ後少し。地元の恵那から雪の便りが届きました。ニカラグアは夏（乾期）に入りましたが、任地のヌエバギネアは相変わらず雨がよく降ります。11月4日に行なわれた市長選挙の後、市長が選挙管理委員会に申し立てていた異議は通らず、市の政権が変わることになりました。23日に最終結果が報道されるまでは、デモ行進が行なわれたり、政党同士の対立があったりと、いつもは穏やかな町も落ち着かない様子でした。こちらでは、市長が変わると市役所の職員も大幅に替わることが一般的なため、青少年の家のスタッフも12月いっぱい仕事をやめることを聞かされました。カウンターパートやスタッフとは、私の任期が終わってからも彼ら自身で継続していけるようにしたいという思いで、一緒にやることを大切にしてきた分、やめてしまうことはただただ残念です。また、短い期間にこれだけいろいろな変化があること、政治や所属政党が人々の生活に大きな影響を与えることに本当に驚きます。何とかしたくても、どうしようもできないことがあるということを感じる一方で、それでも子どもたちのために、残りの任期でできる限りのことをしていきたいと思えます。

☆アートマイルプロジェクト

9月から行なっているアートマイルプロジェクト、2月の壁画完成までどうしてこうと悩んでいたのですが、カウンターパートのアウラは、仕事をやめても最後まで一緒にやるということをお願いしてくれました。手工芸の先生レイナは、「青少年の家が使えなくなった場合は、うちでよかったらいつでも使って。」とお願いしてくれました。こうやって協力してくれる人がいることに本当に感謝です。11月は、壁画の図案について考えました。アウラと話し合った大まかなアイデアを出した後、子どもたちの意見を加えていきました。大きく3つの部分に分け、それぞれ「環境」「文化」「つながり」をテーマにして絵を描き、中央は、それぞれの町で穫れる野菜や果物がなっている木を半



分ずつ描いて大きな1本の木にするというのが案です。子どもたちからは「文化のところにはフォルクローレ（伝統的な踊り）を描いたら?」「ヌエバギネア市の旗を描きたい。」などのアイデアができました。この案を日本の学校に送りました。日本からはどんなアイデアが届くかな。



そして、日本の子どもたちと交換するクリスマスカードづくり。切り込みを2カ所入れるだけで飛び出すカードのできあがり。みんな夢中で作っていました。ある子は雪だるまを作りながら、「雪を届けてほしいなあ〜。」と。かなえてあげたいけど難しいなあ・・・日本語で「メリークリスマス」と名前を書きたいという子も。みんな自分が作ったカードが気に入って、「持って帰りたい〜。」とっていました。少し早いですが、みなさんにもメリークリスマス!



☆ニカラグアの子どもたち

10月半ばのことですが、同期隊員の須貝さんの活動するカモアパ市にあるNGO施設で、スタッフや地域の先生に向けたリサイクル工作の講習会を依頼されて行ってきました。このNGO団体は、アメリカ人が創立し、貧困層の6歳～大学生までに、学校教育、学習支援、子どもたちに必要なサービス（医療、歯科、食事、衣食）の支援をしています。須貝さんはソーシャルワーカーという職種で、問題のある子どもたちやその家族への心理ケアや相談、様々なサービス提供のコーディネートなどを行なっ

ています。施設に通う子どもたちの家庭訪問を行なうというので、一緒に行かせてもらいました。カモアパは農場主の人たちが多く住む中心部を離れると、ビニールや古いトタンで作られた家が並び、水や電気がなくトイレや水場は共同という貧困地域があり、生活に大きな差があるそうです。少し歩いただけで町並みがずいぶん変わり、生活の違いは



☆共同洗濯場では、2歳半の女の子も洗濯していました。

明らかです。トタンでできた4畳半ほどのこの家には大人3人と子ども4人が住んでいます。ベッドは2つ。家族全員どうやって生活しているのか、なかなか想像できないのですが、実際に生活しているのです。8歳のエロイサは、学校に行ったり行かなかったりで、3人の弟たちの面倒をみているそうです。母親が1人で多くの子どもを育て、子どもたちが野菜を売ったり、草刈りをしたりして生計を助けているケースも多いそうです。訪れた先の子どもたちも訪問に加わっていきました。本当に厳しい環境の中で過ごしている子どもたちですが、どこからわいてくるのだろうかというくらいの元気で、木に登ったり、池に飛び込んだり。途中、「この草くるくる回すと花火みたいだよ〜。」と教えてあげたら、道ばたに咲いている花を摘んで渡してくれました。どんどん大きくなって片手で持ちきれないほどの花束に。子どもたちの優しさに何ともいえない気持ちになりました。



須貝さんに活動のことを聞きました。大変なことは、親から子への虐待が多く、それがよくないことだという思いがなくなっているの、しつけには別の仕方があるということがなかなか伝わらず、アドバイスを受け入れてもらうのに苦戦するそうです。一方、活動を行なってきた中で、子どもが働



☆母親の話を聞く須貝さん

かなくても勉強に集中できるようになったり、親からの虐待を受けることが減ったり、彼女を信頼して悩みを話してくれるようになったりというやりがいも感じるようになったそうです。一緒に過ごした短い時間の中では、「厳しい生活環境の中でも、たくましいな。」という印象をもったのですが、長い時間一緒に過ごしていると、元気でたくましい一面、暴力的になったり、ある特定の場面になると話せなくなってしまったり、情緒不安定になったり、行動に現れてくるそうです。訪問中も、初めて出会った男の子が、ぴたっと私にくっついてきました。お母さんとは

小さい時から離れて暮らしているそうです。又エバギネアにも、親と離ればなれで生活している子どもたちが少なくありません。子どもを自分の親や親戚に預けて別の町やコスタリカ、スペインなどに住んでいるという話もよく聞きます。子どもたちにとって、家族の愛情は不可欠だと思うのですが、それが十分にできない状況が現実にあるんだということを感じます。

次の日のリサイクル工作の講習会は、施設のスタッフや地域の学校の先生、25名ほどが参加しました。みなさんとても熱心で、多めに予定していた作品をすべて作ることができました。終わってから作り続けたり、残って型紙を取ったりする先生もいました。こんな風に熱心に学ぶ先生たちを見ると、こちらでもできる限り、日々の活動に生かせることを伝えたいなと思います。後日須貝さんから、「早速施設の先生が、おもちゃの作り方を子どもたちに教えたり、講座で作ったおもちゃで遊んでいたよ。」という話を聞きました。間接的でも、子どもたちの心に少しでも「楽しいな。」という思いが届くとうれしいなと思います。



☆講習会は、ピンクの花がきれいに咲いた木の下で。

それではまた。アディオス！